

アジアセンター事業

国際交流基金アジアセンター(The Japan Foundation Asia Center、以下「アジアセンター」)は、ASEAN諸国の文化を日本国内に紹介してきた「国際交流基金ASEAN文化センター」を前身として、これを発展的に改組し、日本とアジア諸国との間により緊密な関係を築きあげ、多様な文化を有するアジアにおいて共通の価値観をはぐくむことを目指し、1995年10月に創設された。アジアセンターは、

(1) アジア域内各層における対話と交流を通じて相互理解を促進すること

(2) アジア地域が共通に抱える課題を解決するための国境を越えた共同作業を推進すること

を主要目的としている。この目的を達成するため、現在、次の3つの領域において事業を実施してきた。

アジア地域の知的交流推進

アジア各国の文化振興支援

日本におけるアジア理解促進

1. アジア域内の知的交流の推進

アジア地域における相互理解の推進と共通に抱える課題の解決にむけて、調査・研究、会議、ワークショップ等の国際的な共同作業を企画実施するほか、各国の研究機関やNPO・NGOなどの非営利団体が行なう同様の事業に対して、「多様性の理解と共生」「域内共通課題の解決」「社会の平等と開放」の3つの優先領域を設定し、公募助成事業による支援を行なっている。また、アジア地域の次世代を担う人材の育成を目的とするフェローシップ事業やアジア域内の知的ネットワークを強化するための地域研究センター支援事業を実施している。

(1) 国際共同研究協力

イ．企画開発事業

<2003年度事業例>

●21世紀のアジアを考える日中研究者フォーラム

21世紀のアジア太平洋地域における日中関係を軸に、両国関係や国際関係における関心事を両国の研究者間で討議するフォーラム(2000年度後期より4年度にわたり、計6回開催)。最終回にあたる2003年11月の中国・北京で開催したフォーラムでは、これまでの発表や議論を集約し「日中関係の未来発展への展望：東アジアの未来を考える」をテーマとして討議を行なった。全6回のフォーラムの成果として、研究発表論文や討議内容をとりまとめた書籍が出版された。

回を重ねるごとに、日中双方の参加者が忌憚なく討議を行なうことが可能となり、個々の研究者にとって有益な情報を得る場となっていく。また、最終的に成果が書籍として刊行され

ることで、討議の方向性や要点が広く一般にも紹介されることとなった。

ロ．公募助成事業

<2003年度事業例>

- 「国内地域紛争の解決とNGOの役割：インドネシアを事例として」(日本インドネシアNGOネットワーク/日本)
- 「日中韓三国の農業問題に関する研究」(中国人民大学農業経済学科/中国)

(2) 知的交流セミナー・会議等開催

イ．企画開発事業

<2003年度事業例>

- アジア・メディア・フォーラム2003「日本とASEANの協力関係：これからの30年を見据えて」

日本と東南アジア各国において、政策立案と世論形成に影響力を持つメディア関係者、政策形成者および研究者が一堂に会し、日本とASEANの関係をめぐる現況や将来の課題等について率直に討議、意見交換しながら、国境と分野を超えたネットワーク形成を目指す事業である。第1回は、「東南アジアと日本における政治不安定要因と新たな挑戦」(主催：チュラロンコン大学戦略・国際問題研究所)をテーマに、2002年2月にバンコクで開催された。

第2回目となる2003年度は、インドネシアの戦略国際問題研究所が主催し、2003年12月にジャカルタで実施した。「日本ASEAN交流年2003」であることを考慮に入れ、日本・ASEAN間、また各ASEAN加盟国との広範な領域での協力関係を振り返りながら、世代交代や変化の時期にある政治的リーダーシップ、東アジア・コミュニティの形成の可能性等をテーマに、現在地域が共有する政治、経済、文化に関する課題を各国および地域としての視点から特定し、新たなパートナーシップのあり方を討議した。

さまざまな国の政策形成者層と政策に対する評価を行なうメディアや研究者が率直な意見交換を行なうことで、互いに多様な視点や見方を学び、理解する機会であることに對し、参加者からの関心、評価を得た。

ロ．公募助成事業

<2003年度事業例>

- 「日本・ASEAN・コロキウム」(戦略国際問題研究所日本研究センター/マレーシア)
- 「アジアにおける女性と移民に関する国際会議」(デリー大学発展途上国研究センター/インド)

(3) 次世代リーダー・フェローシップ

<2003年度事業例>

●次世代リーダーフェローシップ(派遣)

アジア地域を研究対象とする人文・社会科学系の大学院生、ならびにアジア地域との共同作業に従事する非営利団体職員を対象として、3か月から最長1年間、アジア地域に滞在して調査・研究を行なう機会を提供するフェローシップ事業である。2003年度は、9名をタイ、インドネシア、フィリピン、ベトナム、カンボジア、ラオス、中国に派遣した。

●アジア・リーダーシップ・フェロー(招へい)

アジア諸国において影響力を有する中堅の知識人を専門領域や分野を超えて数名選考し、フェローとして同時期に日本に招へい、日本人共同研究員とともに、共通テーマのもとでの討論や個々の関心に基づく研究を行なう機会を3か月を限度に提供する中期集合研修型フェローシップ事業。2003年度は、中国、韓国、インドネシア、フィリピン、タイ、カンボジア、インドから学術、ジャーナリズム、芸術、NGO活動等の分野で活躍する7名を招へいし、「アイデンティティー、安全保障、民主主義」という総合テーマのもと、フェロー同士が意見交換を行なうワークショップ、専門家を招いて討議するセミナー、ならびに個々の関心テーマについての研究を実施した(財団法人国際文化会館と共催)。

(4) アジア地域研究センター支援

<2003年度事業例>

●東南アジア研究地域交流

東南アジア地域における東南アジア研究を促進し、同地域における研究者のネットワークの構築を目的に、語学研修プログラム、修士・博士課程研究奨励フェローシップ、地域共同研究促進プログラムを、SEASREP評議会(フィリピン)、財団法人トヨタ財団と共同して運営、実施した。東南アジア域内の相互理解と共同の基盤となる人材の育成とネットワークの強化を図っている。

(5) 日本・南西アジア知的共同作業支援

<2003年度事業例>

●日印作家キャラバン

日印作家キャラバン実行委員会が企画、実施する日本とインドの文学者の対話事業を支援した。本事業は、2001年度より開始され、アジア文学の存在可能性、言語が創作に及ぼす影響、文学における古典、民族的背景の作品への影響、文学におけるフェミニズム等参加作家が関心を有する切り口で日印作家の対話交流を実施してきた。

3か年事業の最終年にあたる2003年度においては、2003年11

月、インドから作家5名が来日し、日本側作家との間で、現代文学が抱える問題についてさらに議論を深めるとともに、日印双方の文学における共通課題に焦点を当てたシンポジウムや公開朗読会を開催した。

参加した日印の作家の間で、多様な言語、民族、文化を内包し、宗教紛争が絶えないインドの現代文学の課題と経済・文化のグローバル化のなかで、異質なものに対し不寛容になりつつある現在の日本社会の状況を意識しつつ、それぞれの、また、共通する課題について討議する機会となった。また、シンポジウムや朗読会への一般参加者にとっては、インドの現代文学、その社会、生活を知る機会、また今日の状況に対する日本の作家たちの考えや意見を聞く機会を提供することとなった。

(6) 北東アジア知的リーダー対話事業

<2003年度事業例>

●日中韓フォーラム

日本、中国、韓国の3か国の各界リーダーを一堂に集め、現在、日中韓が共通に抱えている課題について意見交換を行ない、課題解決の方途を探るとともに、3か国のリーダー間の信頼関係を醸成する対話事業である。2003年11月ソウルにおいて、各国から10~12名のリーダー・有識者が集まり、日中韓における文化、政治、経済におけるダイナミズム、朝鮮半島の安全保障状況と大国の動き、北東アジア地域協力の展望と3か国の役割について討議を行なった(財団法人日本国際交流センター、韓国国際交流財団、中国人民外交学会と共催)。

2. アジア各国の文化基盤整備

アジア各国で消滅の危機にさらされている有形、無形の文化遺産を保存・振興し、またこうした民族固有の伝統文化を現代社会に活かすことを目的とした、専門家の派遣・招へい、現地調査、ワークショップ等を実施する。また各国の関連機関が実施する同様の事業に対し、「有形・無形文化の保存、記録、公開」「伝統文化の現代における活性化」の2つの優先領域を設定して、公募助成事業による支援を行なった。

(1) 文化財保存支援

イ. 企画開発事業

<2003年度事業例>

●国際シンポジウム「文化遺産とアイデンティティーとIT：アンコール・ワットと三次元技術の活用」

2004年3月、カンボジアのシェムリアップにおいて上智大学アジア人材養成・研究センターが開催した三次元技術が文化遺産の研究、保存修復、遺産活用にどのような可能性をもたらす



ラオスの古文書保存、普及、国際研究会議



アジア文化遺産フィールド・スクール

かをテーマとする国際会議を支援した。日本、アジア、欧米の9か国30名の研究者・専門家が集まり、カンボジアにおける情報技術の現状と展開、文化遺産とアイデンティティーと地域文化、三次元技術と文化遺産マネジメントの問題、情報技術の活用とグローバル・ネットワーク等について研究発表と討議を行ない、先進技術を文化遺産の保存・活用にどのように役立て得るかというテーマについて、先進国、遺産所在国の双方の立場から議論する契機となる会議となった。

ロ．公募助成事業

<2003年度事業例>

- 「アカ族の歴史的資料の普及」(高地研究所東南アジア山岳民族の文化と発展プロジェクト/タイ)
- 「ラオスの古文書保存、普及、国際研究会議」(ラオス国立中央図書館/ラオス)

(2) 伝統文化振興担い手ワークショップ

イ．企画開発事業

<2003年度事業例>

●アジア演劇研修・研究事業

アジアの伝統文化を現代の芸術創出に活かす画期的な試みとして実践演劇芸術学院(シンガポール)が2001年1月に開設した「演劇研修・研究事業(Theatre Training & Research Programme)」に対する支援の最終、3年目である。2003年度は、インドネシア演劇と日本の能についての講義、ワークショップの実施に対する支援を行なった。

ロ．公募助成事業

<2003年度事業例>

- 北アジア・中央アジア地域における歴史的都市の環境整備・保全ネットワークの構築を目指したワークショップ(慶應義塾大学/日本)
- アジア文化遺産フィールド・スクール(マレーシア工科大学/マレーシア)

(3) アジア青年文化奨学金中等教育招へい・派遣

韓国、フィリピン、インドネシア、マレーシア、タイの5か国の高校生(各国4名ずつ合計20名)に日本の高校に11か月間留学する機会を提供する招へいプログラムと、日本の高校生に韓国、フィリピン、インドネシア、マレーシア、タイの5か国の高校(各国2名ずつ合計10名)に11か月間留学する機会を提供する派遣プログラムである。2003年度のプログラムでは、上記5か国の高校生20名が第8期生として日本の高校に留学し、日本の高校生9名が第7期生としてフィリピン、インドネシア、マレーシア、タイへ、2名が第3期生として韓国の高校に留学し

た。青少年交流を実施している民間団体である財団法人エイ・エフ・エス日本協会および財団法人ワイ・エフ・ユー日本国際交流財団に業務を委託して実施した。

(4) アジア青年文化奨学金大学院留学前予備教育

インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、シンガポール、ブルネイ、ベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマー、バングラデシュの合計11か国の大学学部卒業生および大学院生を対象として、クアラルンプールで、日本留学のための日本語教育を中心とする予備教育を実施するプログラムである。2003年度は第8期生18名が予備教育を修了し、日本の大学院に進学した。また、第9期生18名が予備教育プログラムに新たに参加した。アジア科学教育経済発展機構(Asia SEED)に業務を委託して実施した。

3．沖縄国際フォーラム

アジア・太平洋地域に共通する課題についての国際的な知的対話の機会として定期フォーラムを沖縄において開催する。1997年11月の「沖縄の知的、文化的国際貢献を考える」国際シンポジウムの結果を踏まえ、1998年度より開始した沖縄県との共同実施事業である。

2003年度は2004年3月に「沖縄のうたきとアジアの聖なる空間：文化遺産を活かしたまちづくりを考える」をテーマにフォーラムを開催した。アジア各国で無形文化遺産の保存継承に関わる専門家、NGO関係者を招へいし、沖縄固有の文化遺産である「御嶽(うたき)」と祭や舞踊などの伝統芸能を題材にして、有形・無形の文化遺産を活かしたまちづくりのあり方を共に考えた。世界遺産に指定されたセイファー御嶽視察や竹富島で無形文化遺産の継承に取り組む住民との交流会等、内外の参加者による情報・意見交換を行ない、最終日に那覇で公開シンポジウムを実施した。2003年度のフォーラムに関しては、立命館大学の協力を得た。

沖縄の人々の中で「うたき」や伝統芸能といった文化遺産がどのような形で継承されているかを見直すことによって、アジアや世界の人々と一緒に、これからの豊かな文化遺産継承のあり方を探っていく機会となった。

4．国内におけるアジア理解の促進

(1) 舞台芸術事業

現代演劇を中心にアジアの現在を体現する舞台芸術を紹介することによって、日本におけるアジアへの関心を



沖縄国際フォーラム

深めるとともに、コラボレーションによる作品創造をとおして、アジア舞台芸術の発展と、アーティストのネットワークに寄与することを目指している。

<2003年度事業例>

●「挑発の演劇、南アジア：インド、スリランカ、ネパール、パキスタン、バングラデシュの現代演劇を問う3日間」

大型コラボレーション「リア」に続く、コラボレーション・プロジェクトで、標題にある南アジア5か国から演出家を選定し、全員が対等かつ中心的な役割のもと、共同で一つの作品を創造し、南アジアの現在を考える。プロセスとしては、5人の演出家が互いを完全に理解し、共同作業のビジョンを共有する、

日本の観客に、各自の作品および各国の演劇状況を知ってもらうとともに、将来のコラボレーションへの関心を促す、実際の共同作業によって作品を創造する、という3段階を設定し、今年度はとを実施した。は2月27日から29日まで、国際交流基金フォーラムにおいて、5か国の演出家による小作品の上演と、各国講師によるレクチャーを実施し、これまでほとんど紹介される機会がなかった南アジアの現代演劇事情を俯瞰する重要な機会となった。

	演出家	上演作品	レクチャー講師
インド	アピラシュ・ピライ	「血の島」	アヌラダ・カプール
スリランカ	ルワンティ・ディ・チケラ	「最終バス」	ニルーファ・ディ・メル
ネパール	アヌーブ・パラル	「少女アンマヤ」	スニル・ボカレル
パキスタン	イブラヒム・クレイシー	「NATURE /paradise」	ファウズィア・アフザル・ハーン
バングラデシュ	アザッド・アブル・カラム	「ひらかない薔」	サイード・ジャミール・アフマド

(2) 展示事業

アジアの現代美術を日本に紹介することにより、さまざまなテーマの美術展を開催するとともに、関連するテーマのシンポジウム等を企画・実施する。

<2003年度事業例>

●「アジア現代美術個展シリーズ 「イ・ブル《世界の舞台》」 (2003年6月7日～7月13日)

2000年に開始したアジアの優れた現代美術作家を個別で紹介する個展シリーズの第3回目であり、現在国際的なアートシーンで活躍中の韓国の女性作家イ・ブル氏を取り上げ、本展のため新作《世界の舞台》を中心にドロイングやモンスター・

シリーズを国際交流基金フォーラムに展示し、イ・ブルの新境地を開く展覧会として高い評価を得た。

また本展は岡山の大原美術館へも巡回した(8～9月)。

●第8回アジア漫画展「生きがい」

アジア11か国(中国、インド、インドネシア、日本、韓国、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム)の第一線で活躍する13人の漫画家が「生きがい」という共通テーマのもと、アジア各国に生きる人々の暮らしの中に感じている「生きがい」を描いた新作品88点を東京(国際交流基金フォーラム)で展示した。その後、基金が作品を貸し出すことにより、水戸市、徳島市、小平市、さいたま市などで国際交流協会や地方自治体によって展示された。アジアが国際テロ、イラク戦争、新型肺炎SARSの脅威などにより不安定化する社会の中、アジアの人々が日々の暮らしの中に感じている「生きがい」をユーモアとペースを混じえて描いた分かり易い作品が、日本の市民にも好評を博した。

●「アウト・ザ・ウィンドウ」展(2004年1月10日～2月15日)

アジアの若いキュレーターの共同企画による展覧会の第2回目。今回は中国・韓国・日本のキュレーター3名が写真や映像作品を中心に45作家を選び、国際交流基金フォーラムにおいてインスタレーション作品とシングルチャンネル上映の形で展示した。同時代のアジアの息吹を伝えるフレッシュな展覧会として若い観客を中心に好評を得て、展覧会はソウルへも巡回した(3～5月)。

(3) 映像事業

タイ映画祭、東南アジア映画祭で上演した一部作品については、国内上映権を所得し、2006年まで地方巡回を行なう予定である。

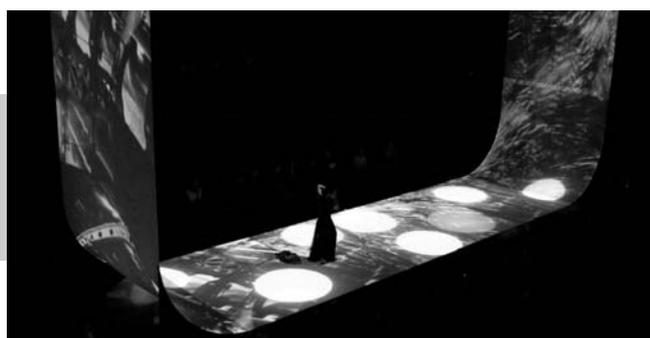
<2003年度事業例>

●「タイ映画祭」

日本ASEAN交流年2003記念事業の一環として、近年活況を呈するタイの映画を日本に紹介することを目的として、在京タイ王国大使館ほかの後援により「タイ映画祭」を国際交流基金フォーラムにて開催した。映画祭には現代のタイ映画を代表する新作5本をはじめ、全20本上映するとともに作品を製作した監督とプロデューサーら計4名を招へいし、トークショーを実施した。

●「東南アジア映画祭」

同じく日本ASEAN交流年2003記念事業の一環として、福岡市総合図書館ほかとの共催により「東南アジア映画祭」を国際交流基金フォーラムにて開催した。映画祭では日本ミャンマー合作映画『血の絆』の完成披露上映をはじめ、映画産業のないブルネを除くASEAN9か国を代表する映画全17本を上映するとともに、作品を製作した監督と俳優計3名を招へいし、トーク



NATURE/paradise(パキスタン)



イ・ブル《世界の舞台》
photo: 木奥恵三

ショーを実施した。

● **アジア映画講座11 映画のアフガニスタン**

映画上映とレクチャーを組み合わせる「アジア映画講座」の11回目として、復興をめざすアフガニスタンを取り上げた「映画のアフガニスタン」を国際交流基金フォーラムで開催した。本講座では隣国イランと日本の映画監督たちがアフガニスタンをテーマにして撮った映画全10本を上映するとともに、作品を製作した監督やアフガニスタン研究者ら計5名によるレクチャーを実施した。

(4) **「アジア理解講座」**

専門家による講義をとおしてアジア各国の文化・社会・歴史等を紹介する一般市民向けの連続講座「アジア理解講座」を、アジアセンターのレクチャー室および一部受講希望者が多かった講座については国際会議場、財団法人国際文化会館講堂にて実施した。2003年度は春、秋、冬の3期に分けて、全10講座を実施し、各講座は原則として10回連続講座(週1回)であるが、テーマにより5回、8回の講座も企画・実施した。

● **第1期(5月～7月)**

「おもしろアジア文化遺産 - アジアの「知」を旅する -」
「ASEANを知ろう」
「『アジア』を交錯するメディア文化」

● **第2期(9月～12月)**

「チベットを知ろう(全8回)」
「『市民社会』 - その構図からアジアの何がみえるか」
「アジアの茶文化をさぐる」

● **第3期(1月～3月)**

「ラオスを知ろう(全5回)」
「インドの近現代文学 - 人々の心と暮らしにふれるために」
「ブータンを知ろう(全5回)」
「東アジアの農業問題 - 不足・所得格差・構造調整」

(5) **開高健記念アジア作家講演会シリーズ**

作家の故開高健氏の遺族から贈られた寄附をもとに、アジア地域の作家を毎年日本に招いて講演会を開催するとともに、日本人作家との交流の場を提供するシリーズの第13回目である。2003年度は、11月にカンボジアの女性作家であるパル・ヴァンナリーレアク氏を約2週間招へいし、「激動の現代史を生きた女性作家のカンボジア」のタイトルで、山梨、熊本および東京で講演会を実施した。同氏の小説・詩・歌・ドラマを通して、現在のカンボジアを紹介した。また、カンボジアに関心を持つ日本人作家との対談も行なわれた。

(6) **情報交流事業**

イ. **アジアセンター・ライブラリーの運営**

東南アジア地域を中心とするアジア地域の文化・芸術についての書籍を収集方針とする専門図書館である国際交流基金アジアセンター・ライブラリーを運営した。蔵書内容としては、図書約7,500冊、新聞30タイトル、雑誌約180タイトル、リーフレット約90タイトル、CD・ビデオテープ約1,400本を所蔵し、広く一般の閲覧に供するとともに、レファレンス対応等の図書館サービスを行なった。また、一般市民が随時訪れることが出来るアジアセンターのインフォメーション・コーナーとして、アジアセンターだけでなく国際交流基金全体の事業についての照会に対応するとともに、事業カタログの販売や頒布を行なった。

ロ. **アジアセンターニュースの発行**

日本におけるアジア理解の促進およびアジアセンター事業の広報を目的として、ニュースレター『アジアセンターニュース』を発行。2003年度はNo.24～No.26の3号を各5,000部発行した。日本国内の大学、図書館、国際交流団体等に配布している。また、同様の内容を基金のホームページでも公開している。

各号の特集内容は以下のとおり。

No.24 「ポップスが結ぶ日本とASEAN 10か国」

No.25 「東南アジアのキリスト教」

No.26 「アジア事業の今後 - その可能性」

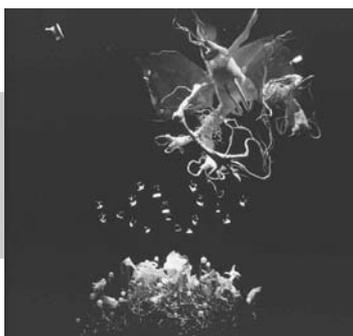
アジアの芸術文化、今日的課題等に関心を深め、また、それを理解する契機として、広範な読者を得てきている。

5. **アジア草の根交流助成**

2002年の日韓国民交流年に合わせて開始した日韓国民交流年草の根交流事業助成プログラムの対象地域を拡大し、日本とアジア諸国の市民同士の相互理解を深め、友好親善を促進することを目的に実施したプログラム。日本とアジア諸国との市民レベル・地域レベルの交流事業82件に対して、実施経費の一部を助成した。2003年は「日本ASEAN交流年」であったことから、東南アジア地域対象の事業を優先した。

< 2003年度事業例 >

- 「第7回日本インド学生会議本会議」(第7期日本インド学生会議)
- 「空飛ぶ車いすの恩返し」(空飛ぶ車いすを応援する会)
- 「アジアの布と手しごと展：アジアの人々とのわかちあい」(アジア女性自立プロジェクト)



イ・ブル《世界の舞台》(下)と《サイレーン》(上)
photo: 木奥恵三

- 「日中韓環境NGO共同ワークショップ：中国の環境NGOの今を探る」(東アジア環境情報発信所)
- 「障害者の自立生活支援の輪を広げるための日韓交流プロジェクト」(自立支援センター・OSAKA)

地域別比率

